Friendship

ニューヨーク育英学園機関誌

VOL. 1 No.2 SPRING 1995

$2.00









THE SECOND FRIENDSHIP



Japanese Children's Society, Inc.
8 West Bayview Avenue
Englewood Cliffs, NJ 07632

BULK RATE
U.S.POSTAGE
PAID
ENGLEWOOD, NJ
PERMIT No.242

※機関誌「フレンドシップ」は、日系マーケティングリストを利用して配布させて頂きました。

〈目次〉

巻頭言・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
学園運営物語・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
幼児部通信・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
(幼児部発表会)
(節分の集い)
(ひなまつり)
※バスドライバー
９４年度幼小合同運動会・・・・・・・・・・・・・8
小学部通信・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
(人間学校)
(クリスマス会)
(小学部学園祭)
(ニューフレンズデイ)
(第２回卒業式)
(ニュージャージー・パフォーミングセンター壁画制作)
(ニューヨーク少年少女野球団)
サタデースクール・・・・・・・・・・・・・・・15
帰国父母通信・・・・・・・・・・・・・・・・・16
作文コーナー・・・・・・・・・・・・・・・・・17
その他・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19
フレンドシップ告知板・・・・・・・・・・・・・20
フレンドシップ・ファンド協力のお願い・・・・・21
ＡＴ＆Ｔ　アソシエーション・リワード
プログラム　協力のお願い・・・・・・・・・・・22
１９９３−９４フレンドシップ・ファンド報告・・23
ＤＯＮＯＲＳ・・・・・・・・・・・・・・・・・24

〈ニューヨーク育英学園
理事会メンバー〉

相談役　寺澤芳男（参議院議員）
名誉理事長　清水靖子チェンバレン（医学博士）
理事長　岡本徹（ＮＹ育英学園園長）
理事　大橋渉（Ohashi Institute 校長）
理事　佐藤登（Azuma Trading Co.会長、元日系人会会長）
理事　Ms. Pat Kinney　(Fort Lee International Children's Day Director)
理事　藤松忠夫（JAL International Service Inc. 会長）
理事　上妻雅浩（ＮＹ育英学園事務長）

〈ニューヨーク育英学園
アドバイザリー・メンバー〉

広瀬輝夫（医学博士）
江田治三（ステイーブンス工科大学教授）
苅谷ジーン（元日米婦人会会長）
咲間横子（元ＮＹ育英学園教諭）
山田行夫（元札幌市立小学校教諭）
木曽利夫（公認会計士）
清水武（会社経営）
好田忠夫（レストラン経営）
東畑朝子（栄養学博士）
宮本政於（厚生省課長、医学博士）
辻山栄子（武蔵大学教授）
リンゼイ芥川笑子（主婦の友ニューヨーク友の会事務長）
横山克美（朝日大学助教授）
カニングハム久子（コミュニケーション・セラピスト）
レイス史（日米カウンセリングセンター）
多志賀明（幼児音楽指導協会会長）
斉藤栄子（元ＮＹ育英学園小学部指導主事）
飯田裕子（元よい子の学園父母会会長）
井上巌（東京学芸大学名誉教授）
水野修孝（千葉大学教授）
岩橋英遠（日本美術員評議員、日本画家）
古本武（古本不動産社長）
関口博（バースト＆ムカマル法律事務所マネージャー）
平山郁夫（東京芸術大学学長）

【巻頭言】

渡米してから三十余年。この世界一の国際都市ニューヨークで人の移り変わり、時代の変遷を目で見、耳で聞き、肌で感じてまいりました。

そして、日米の人たちの物の考え方や、価値観等の相違はやはり教育の違いではないかと私は私なりにアメリカを眺めてきました。

１９６０年代はあの画期的な育児法で一躍有名になって、バイブルの次に売れたというスポック博士の育児書を中心に、子供の意志、権利、個性を尊重した教育がもてはやされたものです。果たして、その結果はどのようなものだったでしょうか。

当時すでにスポック博士に対する批判もきかれましたし、私自身もこれでよいのだろうかと疑問に思ったものでした。こんなことをしていたら、落ちこぼれがたくさんでて大変なことになる。でも、アメリカは国が豊かだから国がこの人たちのお世話をするのだろうと思っておりました。

一方、日本では、こういった落ちこぼれが多くなったらそれこそこの国がつぶれてしまうので、画一的と言われようと、没個性的と言われようと、ともかく半強制的にでもしっかりと基礎教育を全ての人に受けさせ将来どんな分野にも役立つ人材を創るようにしているのだな、と私は解釈していました。

その結果はどうでしょう。

アメリカの生徒の学力はどんどん落ちていき、教育は荒廃して政府はその改革に苦心惨憺しているのが現状です。

個性尊重は確かに少数の目もくらむような英雄、天才を輩出しましたが、その陰には何百万という膨大な捨て石があったのです。

そこでアメリカは世界を見渡したところ、戦後灰塵の中から立ち上がった、天然資源も殆どなく天災が多いという悪条件の小島、日本が四十余年で世界第２の経済大国にのしあがっていました。日本製品は世界中に氾濫しています。日本人は世界中の高価な不動産やら宝石を買いあさっています。

「日本人は魔法使いではないのか」アメリカ人がそう思ったのも無理はありません。では、その魔法の種は何か？とばかり、にわかに日本研究がさかんになりました。

テレビのクイズ番組では日本についての問題が多くなり、また解答者が日本についてよく知っているのに驚かされることがあります。

しかし、日本人は魔法使いではありませんでした。その魔法の種は教育にあったことが、アメリカ人にやっとわかったのです。

アメリカでは、勉強に意欲的な高校生や大学生には熱心にその芽を伸ばしてあげようと努力しますが、低学年の生徒には子供の意志を尊重して強制は一切しない方針の様です。

これでは、どうしても人間は安易な方に流れてしまいます。そして、大切な幼児期に基礎知識もとくに与えられなかった人たちが社会に出たときに有能な労働力になるはずがありません。大人になってから再教育を受けなければならないのです。これは大変な時間の空費です。

今、アメリカは学ぶところの多い日本の幼児教育に注目し始めています。現在、アメリカで日本式幼児教育をしている教育機関は数の上では少ないのでしょうが、質の上ではどんな学校よりも高く、最も理想的な学習機関だと思います。

いつの日か、アメリカの子供達も日本人の子供に負けない学力を身につけて、日本の好敵手になってもらいたいものです。

この世界に冠たる日本の幼児教育を固持している日本人学校、育英学園がますます発展し、多くの英才を育てるために変わらぬご支援を頂けますことを心からお願い申し上げます。

（本学園名誉理事長・清水靖子チェンバレンMD）



【学園運営物語】

「うわーっ、なつかしい。あの子こんなに大きくなって・・・」、「あれっ、この子。めがねをかけてこんなに大人っぽくなったのね。あの妹がもうこんなに・・・」

本学園職員室に張ってあるカードの写真に先生達が歓声を上げている。正月にもたくさんの年賀状が届いた。日本の各地に散らばりもう落ちついた子供達。スイス、ドイツ等ヨーロッパにいる子や香港、シンガポールなどアジアにいる子、そして、アメリカの地方都市に引っ越した元園児達から近況を知らせるかわいい手紙が続々と届く。

名前を見ればどの子にも思い出が多い。その時その時の姿が目に浮かぶ。よく泣いた子、運動会でめげずに頑張っていた子等々。思えばかわいい子供達との楽しい日々ではあったが、海外にある私立日本人学校の運営は茨のような道のりであった。

マンハッタンの片隅で小さな集まり「日本語を話すプレイグループ」が発足したのは、１９７９年の暮れであった。数名のお母さん達が、「このままでは、せっかくのバイリンガルになるチャンスを失ってしまう。何とか我が子に日本語と日本文化も植え付ける場を作ろう」と故丹羽美代子先生を中心に集まり、非営利団体「よい子の学園」が組織された。園児が十数名になったところで、保育に使っていたロフトのリース切れ。移転を余儀なくされる。思い切ってハドソン川の対岸、ニュージャージー州のフォートリー近くに移り、園児１０人で再スタート。１９８４年の春であった。

半年後、二十数名になったところで丹羽園長の他界という深い悲しみを味わう。残った我々スタッフは故人のせっかくの努力を無にしないように存続を願い、子供達が安心できる生活の場、学びの場作りに専念してきた。

創立以来、引っ越しを６回繰り返した末、８９年には東京の学校法人、田中育英会の田中健児先生の援助により、ようやくイングルウッド・クリフスの現本部園舎に落ちつくことができた。この宿無しの危機の時には、父母・職員が学園存続のため一丸となって頑張った。温かい感じのレンガ造りの園舎で、ちょうどよい大きさのグランドもついている。創立１０年目にして得た安住の地である。去る９０年の春には、名称を「ニューヨーク育英学園」と変更した学園は、幼児部、小学部、それぞれ約１００名ずつの大所帯になった。海外の私立日本人学校としては大きい方である。

両親の教育熱心が幸いしているということもあろうが、子供達の知的関心はひじょうに高い。しかし、様々なバックグランドを持った子供が集まってくるのも事実である。

現地校から転校してきた１年生のＳ子ちゃん。友達や先生が話しかけてもただひたすら口をつぐんでいた彼女の自己表現は絵画制作に凝縮されているかのように思えた。その絵は素晴らしく誰もが感心した。誉められると喜々として描き、少しずつ自分の殻を取っていった。

ほとんどの子は日本から来て日本へ帰るのであるが、中には海外を渡り歩き、本学園から日本という未知の国へ行く子もいる。しかし、どの子もしばらく本学園に在園している間に、発表会等では歌や劇で立派に自分を表現できるようになる。だんだん積極性を身につけ、人前でも堂々と話せるようになり、親御さんをほっとさせての帰国となる。そんな時、本学園の存在意義を感じるのである。

１５年近く前、本学園創設期に時を同じくして、３０才の私はメキシコより米国へ引っ越してきた。日本では小学校の図工教師、ラテンアメリカでは各地の大学で美術実技の講師をしていた私は、常に児童教育も手がけていたことにより、丹羽美代子先生と運命的に出会った。ひたむきに子供達の将来を思うその活動の主旨に共鳴し学園づくりに参加することになった。

芸術感覚あふれる家庭的な教育施設をつくろうと丹羽園長との二人三脚が始まった。園長は資金づくりのため外回りを、私はプログラム作りで内側をとの分業で子供達の受け皿づくりに全エネルギーを注いだ。丹羽美代子園長亡き後は、私がその遺志をつぎ小学部を開設。ようやく昨年、６年生までが完成した。ついに念願の幼小一貫教育の受け皿ができたのである。

この３月には、第２回小学部の卒業式を持った。この喜びは並の言葉では表せない。ここまで来るにはＰＴＡをはじめ理事の方々、各企業の方々、アドバイザーの方々等、数限りない人々の協力があった。何と感謝してよいかわからない。その方々の御厚意は本学園の「明るく素直でのびのびした子の育成」という基本方針にそった本学園の教育活動に還元されている。

最近は、アフタースクールの音楽、習字、武道などの教室も増え、園外の方々にも園舎を使ってもらっている。地元の老人センターの会員にも「墨絵教室」に来てもらい好評である。また、現地校との交流会も盛んになってきた。日米の架け橋となり地元に根ざし、開かれた日本人学校になっていこうとスタッフ一同努力している。

日系社会の皆様には、これからも温かく見守って頂きたいと思う。

（学園長・岡本徹）



【幼児部通信】

子供達の発想は実に素直かつ新鮮で素晴らしいものです。私達大人と比べると、ずっと少ない生活経験をフルに活用して物事に立ち向かっていく子供達。彼らの見つめる目、感じる心にいつも感激している私です。育英学園に勤めて早８年が過ぎましたが、その間に数多くの子供達に出会い楽しい日々を過ごしてきました。その８年間に貯め続けてきた私の財産の一つに「名言・迷言集」があります。ここでいくつか紹介してみましょう。

１９８８年８月（年中児）

ある日の昼食時、数人の子供達が「秋」について話し始めた。

「もう秋だよー」

「そうだー、秋だよー」

「ちがうよー、まだ夏だよー」

「８月まで夏で、９月から秋になるんだよ」

「ちがうよー、もう秋だよ！　だって夕焼けがきれいでしょ！！」

１９９０年１月（年長児）

雪が降った次の日の外遊びの時のこと

雪の上で大の字になっているＳ君・・

保育者「Ｓ君何してるの？」

Ｓ君「空を見ているんだよ」

そう言うとむくっと起き上がって走って行ってしまいました。

そばで見ていたＫちゃんがポツリ。

Ｋちゃん「空がおっこちてきたら、すごーくいたいよねえ」

保育者「そうねえ・・・」

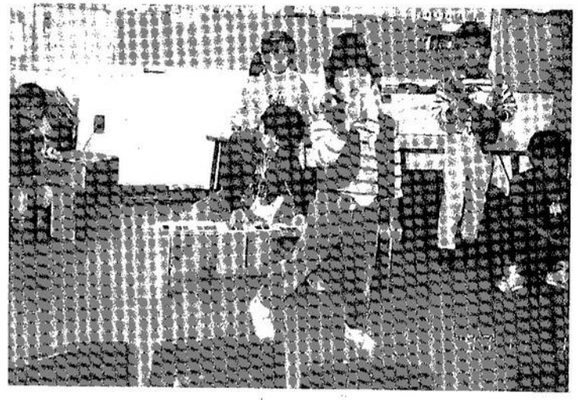
１９９２年９月（年中児）

保育者「昨日、先生の夢にＹ君がでてきたよ」

Ｙ君「えーっ、ぼく、ずっと寝てたよ！」

自然に子供達の口から出てくる会話の数々にそっと耳を傾けてみてください。何気なく聞いていると、聞き逃してしまいそうになる子供達のステキな発言に遭遇できるかもしれません。また、時には子供達と同じ目の高さに立って物を見たり考えたりしてみてはいかがでしょうか。もしかすると胸がときめくような発見があるかもしれません。

（幼児部・小山仁美）



【幼児部発表会】

１９９３年１２月１９日、ニューヨーク育英学園幼児部発表会が催されました。園児達は日頃の練習の成果を出すべく歌やダンスにハッスルし、観客のお父さん、お母さん達を和ませてくれました。私達教師は楽しみな反面、心配しながら見ていましたが、見終わった後、一種の充実感を覚えたのも事実です。

そこで、ここでは充実感を覚えるに至った発表会までの教師の奮闘ぶりについて質問形式で簡単に報告したいと思います。

司会者：育英学園の発表会は、舞台を飾る大・小道具の凝りようといい、教師が子供達と一緒に出演する熱心さといい、見ていて温かみのある楽しい発表会でしたね。

先生：そうですね。どのクラスも舞台装飾には子供達の手が加わっていますから、「みんなでがんばるんだぞ」という連帯感をそのムードの中に秘めていましたね。クラスみんなで作り上げていくところに発表会を盛り上げた要因があると思います。

司会者：演技の順番で待つ時間に幅が出ると思うのですが、子供達の緊張感を維持させるのは大変でしょうね。

先生：私達は子供達の緊張感がなくならないよう、待っている間に漫画や映画のビデオをかけます。興味を一時そらすことによって「待っている」感覚をなくしてしまうわけです。１、２時間程度なら何とか我慢できると思います。しかし、当日は子供達よりも教師の方が緊張しているのではないでしょうか。私も子供達と待っている間に胃が痛くなってきましたから。ハハハ。とにかく待つことは大変です。

司会者：では、最後に発表会を計画、練習していくにあたって最も難しいところはどういうところでしょうか。

先生：教師によってそれぞれ違いがあると思うのですが、私の場合、題材を決めそれを構成するまでが大変ですね。例えば物語を演じる場合、主役がいますから他の役をどう引き立たせるか、子供達の心にどうそれを印象付けるかなどに気をつかいます。発表するからには、自分達の出番に自信を持って出てほしいので、物語の意図を抑えつつ子供達が気に入るキャラクターや内容、台詞であるよう心がけています。

このお話を聞いて私は一つの作品を作り出していく背景には、教師の綿密な計画と子供達を信じ、ともに歩むひたむきな姿勢があることを知りました。子供達を中心に据えること、常に主役にすることは、教師の奮闘無しにはありえないのでしょう。

子供達と自然な形で接することのできる育英学園の教師達。今後もその惜しみない努力を期待しております。

（幼児部・新谷信明）



【節分の集い】

本学園幼児部では、アメリカの行事だけでなく、日本の伝統的な行事もできるだけ取り入れています。その一つが節分です。今回は、９３年度の「節分の集い」の様子を紹介しましょう。

この育英学園幼児部には、パフォーマンス好きの先生がたくさんいて、いつも子どもたちを楽しませてくれます。

節分と言えば、なくてはならないのが「鬼」。ある先生は、節分の日に、朝早くからせっせと顔を赤く塗り、黄色いかつらをつけ、トラパンツもはいて準備万端です。

子どもたちはというと、この日にかぎりなかなか現れない先生を待ちながら、「きょう、ぼくたちの先生やすみなのかなあ」と不安気な顔。

そのうち、節分の集いの時間になり、皆は会場に集まります。そこに登場したのが、先生扮する赤鬼。

「悪い子はいないかあ。泣いている子はどこだあ！」

さあ、大変。こわくて泣く子が続出！かと思いきや、「あ、○○先生だ！」とすぐに正体を見破ってしまいました。さすがは、現代っ子です。

どの子も、先生の変わりように大はしゃぎ。泣くどころか笑いの渦を巻き起こすという「春の珍事」となってしまいました。

ちなみに、豆まきの豆の中には、アメリカならではのピーナッツも混入。からつきピーナッツを見るたびに、楽しかった節分、そしてあの先生の「晴れ姿」を思いだしてくれることでしょう。

（幼児部・新谷美穂）

【ひなまつり】

「あかりを　つけましょ　ぼんぼりに
　おはなを　あげましょ　ももの はな」

この歌をうたう頃になると、女の子は待ちに待っていたひなまつりを迎える喜びでいっぱいです。

「先生、私のうち、おひな様飾ったよ」

「ねえ、幼稚園ではいつ飾るの？」

「先生、おひな様を作ろうよ！」

子どもたちは、目を輝かせて話しかけてきます。

日本と異なった環境にいる子どもたちに、素敵なおひな様を作ってもらおうと、保育者は教材準備に懸命になります。年少、年中、年長とそれぞれ年齢にあったものが作られます。

３月３日の「ひなまつりの集い」には、このようなおひな様たちが会場に勢ぞろい。「さすがは年長児」と思えるものや、かわいいものがあったりと思わず手でさわってみたくなるものばかりです。

子どもたちも、

「先生、お兄さん、お姉さんのすごいね」

「年長さんになったら、こんなの作れるんだね」

などと言いながら見ています。

自分のを見つければ、

「これ、ぼくのだよ」、「これ、わたしのよ」

と、うれしそう。

集いの内容はもりだくさんで、園長先生のお話し、紙芝居、ももの木作り、保育者たちの劇や歌などで楽しみます。そして、その後は、お待ちかねの甘酒ならぬカルピスとひなあられのおやつの登場！。

アメリカにいても、「花より団子」というわけか、やっぱりこのときが一番うれしそう。

異国で祝う「ひな祭」。子どもたちにとっては、忘れられない思い出になることでしょう。

（幼児部・栗田高子）



【車両部（バスドライバー）】

GOD BLESS THE CHILDREN

本学園は、独自に５台のスクールバスと２台のワゴン者を所有し、DOOR－TO－DOORのサービスを行っている。今回はそんなスクールバスを操る車両部の運転手たちの横顔を簡単に紹介しよう。

スタンリーは、今いる運転手の中では一番古株である。彼は、若い頃ポーランドから移住してきた。自宅でビジネスをしながら、決して遅刻することなく真面目に学園に通い続けている。

ビンセントは運転手たちのとりまとめやバスのメインテナンスをしている。学園に来る前はフォード社に勤めていたという彼は、いろいろと気をきかせて動き回ってくれる。彼が勤め始めた頃、「なんで、朝、子供は乗ってくるときみんなミッキーマウスと言うんだ」と聞いてきたことがある。彼には、「行ってきます」が「ミッキーマウス」に聞こえたのである。

ジョーは敬虔なクリスチャン。いつもニコニコしていて非常に温厚な性格は悟りの境地から来るのであろうか。あえて年齢は記さないが、最年長者は彼である。

ハロルドは、ニュージャージー州最大のバス会社ニュージャージー・トランジットをリタイアして学園にやってきた。いつも冗談ばかり言っているが、信頼が置けるベテランドライバーである。

ボリビアは唯一の女性運転手。エクアドル出身。運転技術は男性ドライバー顔負けで、女性ならではのきめこまやかさも持ち合わせている。

最近入ってきたフェルナンデスはキューバ出身。彼もニュージャージー・トランジットをリタイアしてきた。南米人特有の陽気な性格の持ち主だ。

以上、ご覧の通り、車両部は国際色が豊かだ。このお国も育ちも異なる人生の大先輩達に囲まれて、毎日楽しくスクールバスの仕事をさせてもらっている。

（事務、車両部・小山義博）



【９４年度幼小合同運動会】

「走った、躍った、陽灼けした！！」

私達が小学生や幼稚園生だった頃の運動会といえば、学校の運動場に石灰でラインを引き、トラック沿いにテントを張り、電信柱のような大きな柱に紅白の帯を交互に巻き付け、入場門を作り・・・そんな光景が目に浮かびます。その日の朝は、いつもより早く起きだし、くつの代わりに真っ白な新品の足袋をはき、家から学校へと走って行ったものです。

ニューヨーク育英学園の運動会は、その頃と比べると、少々様子を異にします。本格的で広々とした競技場は目にまぶしいほどの芝生の緑と赤茶色のトラックが見事にマッチしており、真っ青な空の色が鮮やかに周りを包み込み、一歩足を踏み入れた瞬間、自分がまるでプロの選手にでもなったかのような錯覚を起こします。

幼小合同なのですが、練習は情報の交換のみで、あとはそれぞれの校舎で行いました。予想通り、総練習ではかなりの時間オーバーとなり、本番に向けプログラムをスムーズに流すための工夫をしました。運動会の主役は子供たちなのですが、その主役たちを陰で支えた先生方の協力ぶりは、さすがはプロ集団だと感心させられました。

素晴らしい晴天に恵まれ、子供たちは練習時の２倍、３倍の力を出して最後まで頑張りました。紅白対抗は３年ぶりの紅組の圧勝。練習の時は両勢力とも拮抗していたのですから、とても不思議です。何はともあれ、炎天下の熱戦と観戦で親も子も真っ赤に陽灼け。しばらくの間はお風呂に入るたびにヒリヒリとお湯がしみたことでしょう。

来年度は、先生、子供、親まで含めた地域対抗リレー等があると、きっと今年以上に燃え上がるのではないでしょうか。

走った、躍った、陽灼けした。そんな今年の運動会。ニューヨークで過ごした貴重な一コマとしていつまでも心のアルバムに収めておいてください。

（小学部・端倉哲也）





【小学部通信】

９４年度１学期も無事終了しました。ここで、「現地に開かれた学校」を目指す本学園小学部の１年間の軌跡を辿ってみたいと思います。

９３年度

《１０月》
- 五鳩みどりさん来園コンサート
- ボストン、プリマス人間学校（５年）
- グリーンメドウファーム野外学習（１、２年）
- ハロウイーンパーテイー
- 服部公一さん、福成紀美子さん講演コンサート

《１１月》
- 学園祭

《１月》
- スケート教室開始
- もちつき、書き初め大会

《２月》
- 国連見学（６年）

《３月》
- ニューフレンズデイ。ティーネック、ロングフェロー校来園

９４年度

《４月》
- ティーネック、ロングフェロー校訪問（２～６年）
- ティーネック、ロングフェロー校インターナショナル・フェスティバルに参加
- 新入生、在校生対面式

《５月》
- リバーエッジ、チェリーヒル校アジアンデイに参加（５、６年）
- ワールドトレードセンタービル社会科野外学習（３年）
- 幼小合同大運動会（ウイントン＝ホワイトスタジアム）
- ニュージャージー州パフォーミングセンター壁画制作（４～６年）

《６月》
- コイノニアキャンプ場修学旅行（５、６年）

以上、本学園小学部はこの１年間、日頃の勉強を疎かにすることなく、様々な活動を行ってきました。日本ではできない体験を子供たちに味わせたいという職員１人１人の熱意がこの１年間の軌跡に現れています。今後も小学部は、目先の目標にとらわれることなく、教科書の範囲を越えたグローバルな学習を追求していく方針です。

（小学部・塩崎智）



・リバーエッジ、チェリーヒル校アジアンデイに参加（５、６年）



・コイノニアキャンプ場修学旅行（５、６年）

【人間学校】

AMONG THE PEOPLE TOUR 94

本学園の５年生の林間学校は、今年度で第２回目。昨年度の第１回目は、ニューヨーク州の旅館兼農場に１泊２日ででかけた。本学園は歴史が浅いこともあり、修学旅行・林間学校の目的地についてはまだ試行段階にある。そこで、今年度の林間学校については、故意に昨年度とは異なる目的地を設定した。

往復に極端な時間がかからない所、アメリカ的な都市、ということで選ばれたのがボストン。貸し切りバスででかけて帰ってくるという社会から隔離された状況を避けるために、公共の交通機関アムトラックを利用した。

今回の林間学校の目的は２つ。まず、英語を積極的に話す機会を設け、日頃の英語教育の実践の場とすること。これには、英語科の小村先生の協力を得て、事前に状況別英会話の特訓を行った。この、人との交わりを中心課題としたことが、人間（じんかん）学校と言われる所以である。

次に、歴史的建築物の豊かなボストンを訪れることにより、アメリカの建国時の歴史にふれること。このため、子供達は夏休みに「ボストン歴史研究」なるものに多大な時間を費やした。

以上、２つの目標を掲げて、１０月１３日早朝に出発。スクールバスでコネテイカット州スタンフォード駅に向かう。そこからアムトラックに乗り、ボストン南駅に到着したのが正午頃。電車内での買い物、昼食（ファーストフード）の注文、バスのチケット購入などは全て児童が役割分担して行う。

この日は、ボストンからバスでプリマスに直行。プランテーションを見て回り、植民時代のアメリカの生活にじかにふれることができた。夜は、はプリマスに宿泊し、海辺のシーフード・レストランで殻と格闘しながら名物ロブスター料理を満喫した。

１０月１４日はバスでボストンに向かい、子供博物館・ボストン茶会事件船・ニューイングランド水族館を見学した。どの見学地も予想以上に楽しめたので、長めに時間をとり最後のボストン美術館は割愛。この日はボストンの中心部に宿泊。

１０月１５日、最終日は、ボストン市内の史跡見学コース、ヒストリック・トレイルを探訪。荷物を持ちながら行動したこともあり子供たちの疲労の影は濃かったが、小雨の降る中無事ボストン・コモンに到着。正午過ぎ、アムトラックでボストンを後にした。

ボストンは、他の日本人学校では中学の修学旅行で行く所。「小学校５年生には早すぎるのでは」という声もきかれたが、子供たちはそれぞれに自分の英語能力に自信をつけ、人間学校を楽しんできたようだった。

（小学部・塩崎智）



【クリスマス会】

９３年度、本学園のクリスマス会では、父母や地元のシニアシチズンを招待して、児童全員によるコンサートが行われた。

いろいろな行事での歌の発表の機会はあっても、器楽演奏の発表は２年ぶり。ほとんどの児童が初めての経験とあって、やや緊張した面もちだった。

本学園では、音楽の授業に、一人一台ずつキーボードを使用する。これは、現地のカシオ・インク社から本学園に寄贈されたもの。クリスマス会では、その成果を見てもらおうと、１、２年生は全員でキーボードの合奏を行った。３年生以上は各学年ごとにリコーダーの合奏を披露した。当日の演奏曲目は下記の通り。

１、２年生	「サイレント・ナイト」
３年生	「エーデルワイス」
４年生	「星に願いを」
５年生	「夕焼け小焼け」
６年生	「夏の思い出」
３～６年生	「主よ、人の望みの喜びよ」
１～６年生	「赤鼻のトナカイ」

最後の２曲は学年合同の演奏。これに、先生方のリコーダー合奏「イエスタデイ」も含めて約１時間半にわたるコンサートとなった。

中でも、３年生以上による、リコーダーとキーボードで演奏されたバッハの「主よ、人の望みの喜びよ」は難曲で、児童たちはみんな真剣そのもの。曲が始まると緊迫した空気が会場を満たした。見事な演奏を終えた後は、観客から「ブラボー！」という歓声とともに熱い拍手がまきおこり、児童達も難行の成就感をかみしめていた。

（小学部音楽専任・福山哲生）



【小学部学園祭】

本学園の２大イベントと言われるのが、運動会と学園祭。特に、学園祭では各学年が趣向を凝らした劇を発表し、毎年児童のみならず父母の方々からも多大な期待が寄せられている。

今年度も、例年通りに児童向けのリハーサルと父母向けの本番の２回公演が行われた。

１年生の出し物は「目だちたがりやのサル」。今年の１年は、「口が達者である」という他学年からの風評を裏付けるかのように、難しいセリフを立派にこなしていた。

２年生は、「女の子がいっぱい　男の子がいっぱい」を、他のどのクラスよりも元気よく演じた。男女のそれぞれの歌とダンスも元気いっぱいで２年生らしさがあふれていた。

３年生は、ビデオを利用したオリジナルの「３年生の大冒険」を演じ、会場は爆笑の渦。明るくユーモア溢れるクラスの雰囲気が見る方に伝わってきた。

４年生は今年はミュージカルに挑戦。「ANATOLE」では、各場面で児童がソロで歌うシーンが登場し、練習の成果と度胸の良さを見せつけた。また、放課後も費やして描きあげたバックの絵やステージ上の小物は、観客をうならせた。

たった５人の５年生は「そして５人が残った　泣いた赤鬼」を上演。笑いあり涙ありのストーリーを一人一人がフルパワーで演じていたのが印象的だった。

誰もがその演技力に驚嘆したのが、６年生の「宿題引き受け株式会社」。植民地時代のアメリカの生活を劇中に盛り込むなど、最上級学年らしく他学年とはひと味ちがうところをアピールしていた。

振り返ってみると、どの学年のだしものもそれぞれの個性がよくでていて、見る者を飽きさせなかった。練習では今一つピリッとせず、不安を感じていた先生方もいたようだが、本番での素晴らしい出来映えに胸をなでおろしていた。「本番に強い育英児童」の本領発揮といったところだろうか。

（小学部・塩崎智）



【ニューフレンズデイ】

本学園最大の学校間交流、ニューフレンズデイが９３年度も華やかに行われた。相手校は例年通り、ティーネックのロングフェロー校。１、２年生は３月１日、３～６年生は３月３日と、２回に分けて行われた。

本学園に到着したロングフェロー校の子供たちは、廊下で握手の歓迎を受けた後、ジムに集合し４つのグループに分かれた。それぞれのグループの中で日米のパートナーを組み合わせ、本学園の児童がロングフェロー校の児童の面倒を見る。

グループ内で自己紹介をした後、全体で漢字クイズ、質問コーナーなどを楽しんだ。なお、今年は６年生による茶の湯を紹介する英語劇も行われた。

その後は、グループごとに行動し、折り紙・伝統ゲーム・漢字クイズ・お餅コーナーなどを回り日本文化への親しみを深めた。

昼食もグループごとに食事。お弁当のおかずを交換するほほえましい光景があちこちで見られた。

９４年５月３日には、このニューフレンズデイのお返しとして、本学園の２～６年生がロングフェロー校に招待された。子供たちは、前回パートナーだった子に会えるか、どんなアクティビティがあるのか、アメリカの学校がどんな所か、とわくわくしながらロングフェロー校に向かった。

清教徒や独立戦争の劇を見たり、リンゴキャンディーを作ったりと、プログラムを十分に楽しんで帰ってきた。

今回は、英語科が子供たちに学校間交流についてアンケート調査を行ったので、その結果をここに記しておく。まず、「アメリカ人の話す英語が理解できたか」という質問については、全体の約４４％が「よくわかった」「すごくよくわかった」と答えた。そして、英語を話す方に関しては、「まあまあ話せた」「よく話せた」と答えたのが全体の約４７％を占めていた。また、子供たちの感想を見ても、「いっしょにしゃべりたい」、「今度はもっとよく話せるようになりたい」といった前向きなものが多かった。

日本人学校の生徒の現地語能力は全世界で問題になっているが、今回のニューフレンズデイのように、内からわきでる「自信」や「動機付け」が得られれば、外国語の学習効果は自然と高められるにちがいない。

学校間交流などを通して、本学園では「英語が好きな子供」「アメリカが好きな子供」が続々と増えてきている。この経験が将来の国際的な活躍を嘱望されている子供たちにとっては、何にもまして重要であることは言うまでもない。

（小学部英語課・小村裕美）



【第２回小学部卒業式】

１９９４年３月２１日、本学園小学部第２回卒業式が挙行された。卒業生は、上杉穣君、加藤雄介君、川俣光太郎君、小林太志君、後藤田歩さん、猿丸眞月さん、武盛景子さんの計７名。

卒業式当日、学園の入り口には、卒業生が百瀬先生の指導のもと９月から３月までかかって作り上げた巨大なトーテンポールが立てられた。また、学園に入ると、廊下の壁いっぱいに卒業生が育英学園での生活をふり返り、一人ひとりの十大ニュースを書いた壁新聞が張り出された。式会場には、在校生が描いた卒業生の似顔絵が飾られ、晴れの日の雰囲気を盛り上げていた。

卒業式はえんじ色のガウンを着けた卒業生の入場で始まった。

在校生代表７人は、卒業生一人ひとりの前に出て、各自がその個人との具体的な思い出を入れた送る言葉を読み上げ、卒業生は半分照れながらも神妙な様子でその言葉に聞き入っていた。

各学年からの送る歌も、福山先生の指導で１年生から５年生までよく選曲され、それぞれに素晴らしい合唱だった。特に５年生は、４人しかいない中で「 切手のない贈り物」（これは、今回の卒業生が昨年第１回目の卒業生を送る時に歌った思い出の曲）をそれぞれのソロを入れて歌い上げ、その姿は感動的だった。

卒業生の言葉も、幼児部から９年間を過ごした小林太志君から１年余りの上杉穣君まで、各自が育英学園でどんな思い出を作ってきたのかを語っていき、聞く人々を感動させた。特に、在校生の送る歌や言葉に感動した川俣光太郎君が、その思いをお礼の言葉として、その場でつけたして語ったのは、今回の卒業式を単に練習し作り上げられたものでなく、生き生きとした場と変えるのに大きな役割を果たしてくれたといえよう。

最後に全員で「気球に乗ってどこまでも」を合唱し式は終わった。

（小学部・ヤングミツ子）



【ニュージャージー・パフォーミングセンター壁画制作】

今から２年後、ニュージャージー州ニューワーク市に、リンカーンセンター規模のパフォーミングアートセンターが完成する。この建築計画の竣工式にともない、ニュージャージー州の学校の子供達による壁画作品を展示しようというプロジェクトが企画され、本学園も参加を依頼された。

８フィートの大きなパネル３枚と絵の具をニュージャージー州からもらい制作にとりかかったが、毎年学園祭で縦１０フィート、横２０フィートサイズの劇の背景を描いてきて、経験豊かな４～６年生が１枚ずつテーマを決めて分担して描くことにした。

４年生は「オーケストラ」、５年生は「サーカスと音楽」６年生は「音のハーモニー」とそれぞれテーマを設定。皆が自由に意見を出し合って壁画が彩られてゆく。

「お～い。そこは青よりも紫色の方がいいよ」、

「青は暗いから少し白をまぜて明るくしようよ」、

「先生、ライオンを描いてもいいですか」

各学年の絵にどんどん色がついて最後のまとめが近づいてきた。自分の思い通りに絵を進めてきた子供達は、隣と筆がふれあうころになると、お互いの絵の境目をどうするか話し合いを始める。自分の描きたい事が先に立って話し合いがまとまらない時もある。絵は静かに描くものと考えられているが、共同制作の場合は、皆のやりたい事が一つにまとまるような最後の一筆が大切になる。

大きなパネル画３枚を壁に並べ遠くから見ると、今まで自分達が必死で色を塗っていたものとは違った存在になり、絵自身が語り始める。

無我夢中で描いた絵は最終日を迎えた。

パフォーミング・センターの展示会場には、このような力作が２００枚ほど展示された。もちろん本学園児童も参加。他にも、小学生から高校生までニュージャージー中の学校からスクールバスに乗って、小さな画家達が駆けつけた。会場では、皆が自作の前で思い思いのポーズをとって記念写真をとっていた。

この企画に参加した子供達がお互い絵を通して体験した思い出は、何十年か後に彼らが大人になってから、楽しかった記憶としてニューワークの地に残ることになるだろう。



そして、ここに集まった子供達の中から、いつの日かこのパフォーミングセンターのひのき舞台に立って活躍する子供が出るかもしれない、という期待を胸にスクールバスで帰途に着いた。

（小学部図工専任・百瀬啓一郎）

【ニューヨーク少年少女野球団】

本学園小学部に野球部が設立されたのは、１９９０年１１月のことでした。ワールドシリーズが終わり、そろそろ北風が吹き始め、冬時間にもどり日も短くなった頃です。つまり、野球をするには、まったく季節はずれな時期にスタートしたのです。

なぜ、野球部が設立されたのでしょうか。アメリカで生活していると、児童の行動範囲が制限され、基本的な運動量が日本で生活していたときよりも極端に減り、運動不足になります。学校の体育でも時間的な限界があります。何とかもっと運動する機会を子ども達に与えたい、という願いを込めて野球部を設立する運びとなりました。



今年も新入部員がぞくぞくと野球部の門をたたきました。しかし、そのほとんどの子が４年生になるまで野球をやったことがない子ばかりです。日本にいると、小さい頃から野球に触れる場面がたくさんあります。しかし、アメリカで育った子は、現地のリトルリーグにでも参加しない限り、野球という言葉は知っていてもほとんどやったことがない子が多いようです。ですから、ボールの握り方、バットの持ち方などから練習は始まります。

また、野球のルールは多少複雑ですので、毎日いろいろなハプニングが起こります。取ってもどこへ投げていいのかわからない。バッターボックスに入ってもカウントがわからず、自分が三振したことに気がつかない。アウトになるまいとして外野まで逃げていってしまう・・・など、マンガのような場面の連続です。

そんなこんなで練習を続け、なんとか試合運びができるようになると、現地のチームに試合を申し込みに行きます。今年も２回試合をしました。いつも、「今日はいけそうだぞ」と思うのですが、やはり、緊張気味になるのでしょうか、いまだに勝ち星があげられず、たいていはボロ負けです。その都度、私は「がんばれベアーズ」の監督の気分を味わっています。

しかし、この現地校との対抗試合は常に我々に良い課題を与えてくれます。そして、次の試合への闘志がわいてきます。また、子どもたちにとっても大変貴重な経験で、心に深く残る思い出になるようです。ＯＢたちからも、よく昔の試合の時の話しを耳にしたりします。

初勝利の夢を目指して、今日もバット片手にグランドでゲキをとばしています。

（野球部顧問・砂川博文）



【サタデースクール小学部】

「わたしは、この４月からニューヨーク育英学園のサタデースクールに通っています。とても楽しいので、毎日この学校があったらいいのにと思います」。

待ちに待ったサタデースクールが、１９９４年４月ついに開校した。１年生２７人、２年生２０人が毎週土曜日になると元気よくやってくる。皆、月～金曜日までは、現地校に通っている子供達だ。

サタデースクール小学部では、国語２時間、算数２時間、生活１時間、体育１時間の６時間授業を行っている。授業中も休み時間も子供たちは元気いっぱい。とにかく、日本語で堂々と話せるということでどの子も発言力旺盛。しまいには、どうしても先生に話を聞いてもらいたいために、授業中でも教師のところまでやってくる子も一人や二人ではない。休み時間はグランドを喜々として走り回り、男女仲良く遊んでいる。

サタデースクールは、全日制小学部と同様に、子供達に詰め込み教育を行うつもりは毛頭ない。アメリカに一生住む子もいれば、いつかは帰国する子供たちもいる。将来は中学受験を考えている子もいるだろう。このような児童たちの学習目標を単一に設定できるものではない。

サタデースクールでは、各科目とも「これだけはおさえておきたい」というポイントを設定し、その内容を重点的に教えている。

学校というと学習ばかりが取り上げられがちだが、英語と日本語の二つの言語生活と日々格闘している子供たちの精神衛生も忘れられてはならない。育英学園では、基本的には日本の学校の雰囲気の中で、適度にリラックスして勉強してもらう。

先日は、スポーツ大会も行われ、子供たちはサッカー、すもう、ドッジボールなどの各種の競技で、それぞれおもいおもいに実力を発揮して楽しんでいたようだ。

現地校では消極的な子であっても、サタデースクールでは一人ひとりに活躍の場が与えられる。彼らが様々な意味で自信を持ってくれることが、サタデースクール職員一同の願いである。

（サタデースクール小学部・塩崎智）

【サタデースクール幼児部】

「せんせい、おはようございます」

と、元気な子供達の声とともに育英学園サタデースクール幼児部の１日が始まります。朝の支度をしながらも、

「せんせい、あのね・・・」、

「みてみて、あたらしいくつなの」、

「ぼく、きのうね・・・」

と話したいことがたくさんあるようです。子供達は、平日は現地の幼稚園や小学校に通って、英語による保育、教育を受けています。そのような子供たちを対象に「日本語による日本の幼稚園」として昨秋スタートしたのが、サタデースクール幼児部です。

サタデースクールでは、日本の幼稚園教育要領に沿いながらも、言葉や運動など当地の特殊性も配慮した教育も行っています。運動の時間やお帰りの前の紙芝居は子供達が大好きな活動の一つで、毎回楽しみにしています。

現地校の生活に慣れた子供達にとって、日本の幼稚園の生活は新しい発見があるとともに初めての事への戸惑いもあるようです。例えば、「どうして教室の中では違う靴を履かなくてはいけないの」、「どうして日本の幼稚園にはスナックを持ってきてはいけないのか」などと訴えてきます。また、「せんせい」という言葉を使ったことがなかったのか、教師を「おねえさん」や「あなた」と呼んでいる子供達もいました。

入園当初は、初めての環境に対しての様々な反応がみられますが、日本語の環境のせいか、比較的園生活に慣れるのが早かったです。

言葉の面では、大半の園児は日本語を母国語としているため、今の段階では日本語の問題はなく園生活をスムーズに送っています。かえって、子供達は「ここは日本の幼稚園だから日本語が通じるのだ」という安心感からか、口数も多く活発でそして何よりものびのびとしています。

サタデースクール幼児部では、異文化の中で生活し教育を受けている子供達が、のびのびと楽しんで幼稚園生活を送れるような環境作りを心がけています。

（サタデースクール幼児部・石崎麻紀）

【帰国父母通信】

「帰国して改めて感じる『のびのび教育』の素晴らしさ」

「今日、希未ちゃんがあいさつしてくれたんです。『私は幼稚園が大好きだった』って。お誕生会に来ていたお母さん達ともらい泣きしてしまったんですよ」。年中で入園してわずか半年余りの１９８５年晩秋、日本の幼稚園に最後のお迎えに行った時の先生のお言葉でした。それから９２年の夏に至るまで、予想以上に長いアメリカ生活＝「ＮＹ育英学園」生活を送ることになりました。

とっても楽しかった幼稚園生活を断たれ、足どりの重い希未。一方、耕太郎は、見送りに来てくれた近所の子供達に、「明日また公園で遊ぼうぜ」・・・・

「ン？」３才の彼には当然の事ながら状況の把握ができていません。そんな二人を連れ渡米したのが１２月初めの寒い日でした。

希未はさっそく育英学園（旧称、よい子の学園）に、毎日１時間余りの道のりを、園長先生自らの運転によるスクールバスに揺られて通い始めました。ある日、飲んだことのないコーラの大きなカン（アメリカでは普通サイズでした）を持ってバスを降りてくるので聞いてみると「園長先生が帰りにスーパーで買い物をした時買ってくれた」との事。今では懐かしい思い出です。その後３カ月ほどたって、耕太郎が週２回通園するようになりました。

学園への入学は、主人が予め教育に関していろいろ調べ、学園へも何度か足を運んで決めていたものでした。これから、言語を確立していく時期に、いずれ帰国する日本の母国語をしっかり身につけさせたいという願いからでした。振り返れば長い滞米生活でしたので、日本語が確立してきた頃、現地校へ切り換えてもよかったのですが、今思えばあれだけ存分に育英学園の教育を受けられたのは結果的には「正解」でした。育英の「大らかなのびのび教育」は逆に帰国後たくましく適応していけるだけの底力を養ってくれます。マニュアル通りの日本的な教育は日本でいくらでも受けられます。育英学園の良さを生かした温かい教育こそ貴重なのではないでしょうか。熱意ある先生と生徒一人一人との触れあい、心のこもった授業、休日登校までして皆でつくり上げた壁いっぱいの絵、ＮＹコイノニアでの自炊キャンプ、お箸で一緒にラーメンを食べた現地校との交流会、お父さん達もうれしそうだった親子野球大会、リンカーンセンターへ皆で聴きに行ったコンサート、イングルウッドでのスケート教室、心に残る仮卒業式・・・・。数え上げればきりがない数々の思い出が、子供達の財産となっています。

何時しか英語もたんたんわかるようになってきた希未と耕太郎は、育英学園はもちろん、アメリカという国を体全体で好きになっていました。大らかな人々と美しい風景、楽しかった夏のキャンプ、いつも優しかった近所の人達、庭に仕掛けた「オリ」で捕まえた８匹のラクーンをその度に山に放しに行ったこと、希未が尊敬するロシアンバレエのアリーン先生、耕太郎が４才からお世話になったテコンドーのプレツ先生・・・・。人間にとって出会いはとても大切なものですが、アメリカにてさまざまな魅力ある外国人と知り合えたこと、そして、育英学園で本当に熱意ある良き先生方に恵まれたこと、そしてもう一つ忘れてならないのが、田中育英会理事長の田中先生との出会いです。子供までもが「宿無し危機」の不安な気持ちでいた時、ご好意で現在の園舎を買われ、提供してくださったのです。先生にお会いする度に、その情熱的、人間的温かさに触れ、感動を覚えたものでした。

さて、帰国が近づくにつれ、子供達から、「どうして日本に帰らなきゃいけないの？」の連発。「ウーン、どこかで聞いたような。取りも直さず７年前、渡米が決まった頃の希未の言葉の裏返し。「これは時間の問題。日本でもきっと頑張れるぞ！」

育英生活を振り返って感じることは、まず第一に、子供達をのびのびとたくましく成長させてくださったことへの感謝。それから、できればあまり日本に目を向けすぎずに、（今や駐在員の激減に伴い厳しい状況下だと思いますが）これからも学園の良さをいかした教育を続けていって欲しいこと。そして、アメリカではどうしても送り迎え等で子供に密着した生活形態ですので、彼らの自立を助けるためにも、全般的にもう少し遠くから子供達を見守れる余裕があったらいいのかな、というのが率直な感想です。

この春に、第一期生の代である希未達の同期会が催されました。お忙しいスケジュールの中ご参加下さった菅原先生、村田先生を始め総勢３６名が集い、賑やかな会となりました。今は各々異なる環境下にいる子供達が、久しぶりに会ってもすぐまた１つになれるすばらしさ。これも育英教育が生みだした成果の１つですね。帰国後も、父親、母親、子供、親子、いろいろな形で交流を保てることはありがたいことです。

育英の空気を存分に吸ったわが家の子供達は、お陰様でそれぞれの学校生活をフルにエンジョイしております。そして現在、育児サークルのボランテイアをしている私は、子供達が受けた貴重な教育を少しでも還元できればと願いつつ、カリキュラムに頭を悩ます日々です。

（９２年度帰国・高月香澄）

【作文コーナー】

本学園小学部では、日本語教育の一環として作文指導を重視しています。子供達が個性あふれる内容の文を、正しい日本語で書き表すことができるような指導を心がけています。

おかあさんにプレゼントをあげた

２年　酒本真由子

５月８日は母の日です。金よう日のよるに、わたしが子どもべやで、お人形あそびをしていたら、お母さんが来て、

「明日とあさって、りょこうに行くから、用いしてね」

と、言いました。わたしは、ガクッときました。なぜかというと、日よう日にあげるはずの、３まいのおし花や、お手つだいカードや、お母さんのしや、英語で書いたお手紙が、日よう日にあげられないからです。

わたしは、しょうがないから、金よう日のよるあげました。わたしは、

「母の日おめでとう！」

と、言って、お母さんにプレゼントをわたしました。お母さんが、「あっ、これなあに」

と、言ったので、わたしは、

「これは、ハ・ハ・ノ・ヒ・ノ・プ・レ・ゼ・ン・ト」

と、言いました。お母さんは、わざわざ一つ一つのプレゼントに、

「きれいだね。くろうしたんだね。かわいいね」

などと、言ってくれました。

お母さんが、

「お手つだいカードいつまでつかえるの」

と、きいたので、わたしは、

「らいしゅうの日よう日まで」

と、言いました。

お母さんが、ふくろの中のきいろい紙を見て、

「あっ、これは」

と、言ったので、

「お母さんのし」

と、言いました。わたしが、

「おかあさんのひざに、すわっていい」



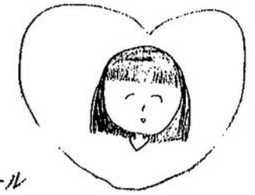
と、きいたら、お母さんは、

「いいわよ」

と、言いました。わたしは、お母さんのひざにすわって、お母さんに、わたしが書いたしをよんでもらいんました。よみおわったら、

「おもしろいね」

と言ってくれました。わたしはとてもうれしかったです。



ロングフェロースクール

５年　宮澤奈津希

今日、ロングフェロースクールに行きました。私のパートナーはジェニーでした。この前のニューフレンズデイの時と同じだったので、私はうれしくなってとび上がってしまいました。ジェニーもうれしそうでした。

ジェニーは、お弁当の時に、「これ、おいしそうだから、ちょうだい」と何でもかんでもほしがります。私は大笑いしてしまいました。私のとなりにいたエリカが「あげたらだめだよ」と何回も私に言いました。

ジェニーは、まーちゃんからもキャンデイーをもらってじまんしていました。エリカも「ちょうだい」と言いましたが、今度はジェニーが「ダメ」と言いました。私は思わずクスクス笑ってしまいました。

少し時間がたってから、私達が招待してもらったお礼に花笠音頭を踊りました。私は、エリカの前で踊りました。エリカはにっこり笑ってくれました。

終わった後にロングフェロースクールの人達が日本語の歌をうたってくれました。私は上手だな、と思いました。日本語の歌をいっしょうけんめい練習したんだろうな、と思いました。

最後に、ロングフェロースクールの人達とあく手しました。ジェニーは、私の手を力いっぱいにぎったので、私は「オー」と大声をあげました。

私達がバスに乗った時に、ジェニーが手をふってくれたので私も手をふりました。また会う機会があったらいいです。

我がなわとび大会に悔い無し

5年　及川祥平

カッポーン。何かとんだ。突然、なわが横の方へふっとんだ。終わった。ぼくは、このなわとび大会の前とびに命をかけていた。もう少し長くとべていたら、3位に入れたかもしれない。なのに、うらめしくも、自分のなわの手で持つ部分と、なわがはずれてしまった。

ぼくは、ガックリきてすみによった。神徳君もぼくのなわがふっとんだのを見て、ビックリしてつっかかってしまった。もう後は、5年生では斉藤君しかいない。まどかは、さきほどやめてしまった。　斉藤君は、まだ6年生の武盛さんと争っている。しかし、どうにか前とびでは、斉藤君が優勝した。次の後ろとびでは、神徳君が優勝。

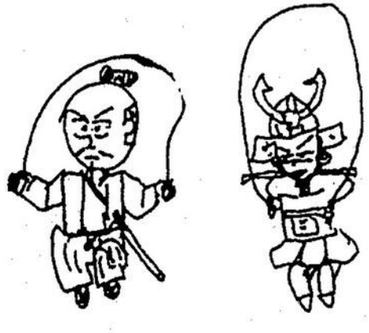
ぼくはというと、はずかしいことに各とび方でドジなことをして、横にいる人達に笑われるだけだった。

交差とびでは、足の指と指の間になわがはまってピーンとひっぱったものだからたまらない。どこか忘れたが、身体の一部がコリッといい音を出して痛くなった。

あやとびでは、まちがえて交差とびをしてしまい、あわててもどそうとしたら、腹の部分でからまってしまい、思わず「ウゲッ」と言ってしまった。

こんな恥さらしなことをして苦しんでいるのに、横にいる小村先生や加藤先生は、こらえきれず「クックックッ」と笑っている。少々悔しかった。

このなわとび大会では何もできなかった。しかし、自分としては最高に努力してやったつもりだ。ぼくは、思い残すことは何もない。



育英学園と私の中の思い出

6年　後藤田歩

「大丈夫かなあ」

英語のことなど全然考えずに、期待に胸をふくらませ、１９９１年9月6日、4年生のとき私はアメリカの地をふみました。

アメリカに来て、一番楽しみであり心配だったのが、『学校』です。日本では、転校を一回しましたが、転校した先の学校で思うようにとけ込めず、毎日、毎日イヤだイヤだと思いながら過ごしたので、アメリカの学校でもうまくやれるか不安でした。

そんな気持ちをもって育英に入りましたが、その不安は一日でどこかにいってしまいました。たぶん、男女仲良く遊ぶところやみんな転入生なのでなじみやすい雰囲気ができていたからだと思います。私には夢のような日々でした。

けれども、美由ちゃんが帰国してから何かが変わりました。小さな仲良しグループがいくつもできて、男女の仲も以前ほどではなくなりました。それでも、私の中にはたくさんの思い出が入っていきました。楽しかった林間学校、こわごわやった組体操、そして卒業への長い道をトコトコゆっくり歩いていきました。たくさんの友達が帰国していきました。5年生のときの学園祭では、おじいさん役になって、みんなが、

「アユちゃん、おかしい！」

と言い、私もいっしょになって笑ったりもしました。6年の運動会では捻挫をして2種目しか出られませんでした。

不安でしょうがなかった私をあっという間に楽しさでいっぱいにしてくれた育英学園。私は卒業していくけれど、育英学園にはいつまでもあのころのように転入してきた子がすぐになじめるような雰囲気を保っていってほしいです。

【その他】

《コンピューター・ルームより》

「紙と鉛筆への挑戦」

米国の一部の大学では、入学時に携帯用のコンピューターの持参を義務付けている所も出てくるほど、コンピューターはすっかり身近なものになってきました。しかし、我々大人の中には、まだまだコンピューター恐怖症にかかっている人も多いのではないでしょうか。

専門家によれば、コンピューターも「紙と鉛筆」に過ぎないのであり、新しい文房具だと考えればよいとのこと。モニターが「紙」、キーボードが「鉛筆」ということなのだそうです。

さて、本学園では既にコンピューター・ゲーム等で下地のある子供達に、本当の意味で、コンピューターを身近な文房具にするために、各教室にコンピューター導入したところです。

ヒトの知能が創り出した傑作と言われるコンピューターの無限の可能性に挑戦していってほしいと思います。

※野村総合研究所様、日本長期信用銀行様より、コンピューターのご寄付を頂きました。ここに記して、感謝申し上げます。

《小学部卒業生進学先》

本学園の卒業生、仮卒業生は、例年その半数は、国立、私立の中学を受験する。結果は良好である。また、本学園からの帰国児童は、私立小学校に編入する場合もある。

ニュー・ヨーク日本人学校中等部
啓明学園中学校
学習院女子中等科
慶應義塾湘南藤沢中等部（※）
大妻中学校（※）
実践女子学園中学校（※）
（※）は仮卒業生





☆フレンドシップ告知板☆

［学園章デザイン募集］

創立１５周年を記念して、ニューヨーク育英学園では、学園章のデザインを新しくすることに致しました。本学園の教育理念にふさわしい、ユニークなデザインを募集します。

みなさまのご応募をお待ちしております。どうぞ、ふるってご応募下さい。

尚、これまでのデザインは本学園が「よい子の学園」と呼ばれていた当時のもので、４年前、ニューヨーク育英学園と改名されてからは、古いデザインのままになっていました。すでに、かつての在校生などからデザインが寄せられているのですが、今回一般からも広く募集することになりました。。

締切：１９９５年３月３１日

宛先：Japanese Children's Society, Inc.
JCS School Pin Design Contest
8 West Bayview Ave.,
Englewood Cliffs, NJ 07632

以前の学園章



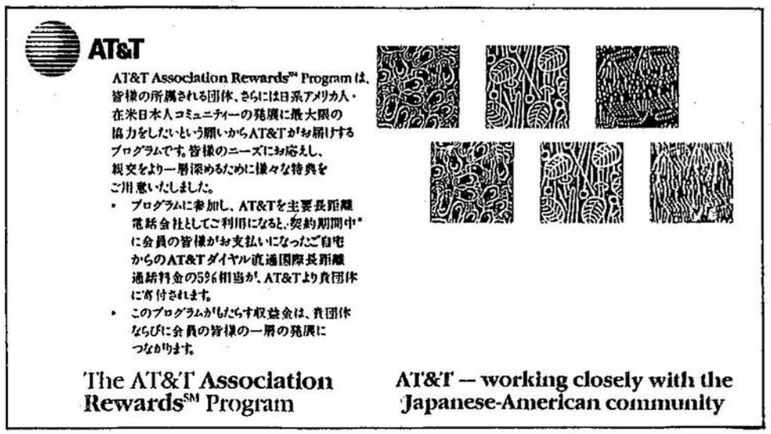
［文通コーナー］

日本人と文通したいアメリカ人の方、アメリカ人と文通したい日本人の方、住所とお名前をお知らせください。

Japanese Children's Society, Inc.
Friendship penpal
8 West Bayview Ave.,
Englewood Cliffs, NJ 07632

＜アメリカ人との文通希望＞（敬称略）

・土谷善子（主婦）、英範（大２）、香織（高２）、和範（高１）
東京都練馬区高野台４－１－２
（日本に興味がありながら、いらっしゃったことがないような方。年齢、性別不問）



【ニューヨーク育英学園　フレンドシップ・ファンド】
《ご協力のお願い》

１９７９年、マンハッタンの一室で数名から始まった本学園は、１４年後の現在、児童総数２００名余りにまで成長し、海外に於ける数少ない幼小一貫教育の場として、これまでに８００余名の児童の保育、教育に携わってきました。本学園は、日本国内に母体がなく、現地アメリカで父母と教師が一体となって草の根的に成立した私立の学校で、アメリカにおいて非営利団体として認可されております。

さて、数名から始まった本学園は、これまでに幾多の試練に見舞われました。園舎リース切れによる移転は、５度に及んでいます。しかし、その都度、数知れない方々の援助のおかげで移転先を見つけることができ、現在に至っております。

海外における幼稚園、小学校の運営には非常に厳しいものがあります。有志の方々の温かいご寄付以外は、運営費の１００%を保育料、授業料で賄っている本学園では、設備の充実、運営資金の確保のために、学園関係者が一丸となって、開園以来バザーやファンドレイジングを行ってきました。

しかし、それだけでは運営が非常に厳しいのが現状です。アメリカにある私立の日本の学校ということで、非営利団体であるにもかかわらず、日本政府からもアメリカ政府からも援助を得られず、両者の狭間で苦しんでいる状態です。

そこで、今回広く日本の皆様のご援助を頂くことを願って、ニューヨーク育英学園（英語名：Japanese Children's Society, Inc.）フレンドシップ・ファンドを設立しました。皆様のご協力をよろしくお願いします。

【特典】

・フレンドシップ・ファンドのCertificate of Appreciation（感謝状）を送らせて頂きます。
・学園のフレンドシップ・トーテムポール（１９９４年５月完成）に随時、名前を刻みます。
・法人の場合、本学園の定期刊行物に広告を載せます。

お問い合わせは

日本(1) 〒156　東京都[redacted]
NY育英学園「フレンドシップ・ファンド」
[redacted]
(2) 〒618　大阪府[redacted]
NY育英学園「フレンドシップ・ファンド」
[redacted]

アメリカ　Japanese Children's Society, Inc.
(NY Ikuei Gakuen)
JCS Friendship Fund
8 West Bayview Ave.
Englewood Cliffs, NJ 07632 U.S.A.

日本語で下記までどうぞ
TEL: 米国　201-945-5151
FAX: 米国　201-944-3680

※　１９９３−９４年度のフレンドシップ　ファンド協力団体所属の方々の本学園への優先入学制度は、１９９５年３月をもちまして終了させて頂きます。

ＡＴ＆Ｔ ｱｿｰｼｴｰｼｮﾝ･ﾘﾜｰﾄﾞ ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ へのご協力のお願い

１９９５年１月

ニューヨーク・メトロポリタン
在住の皆様へ

皆様には益々ご清祥のこととお喜び申し上げます。

さて、この欄ではＡＴ＆Ｔのアソシエーション・リワード　プログラムのご紹介をさせて頂きたく存じます。

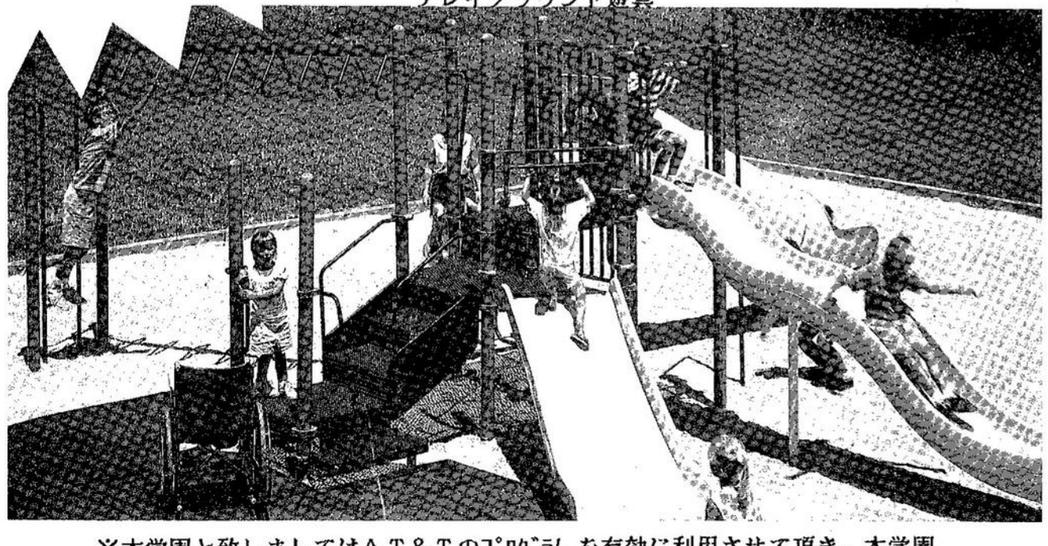
既に、ご存知の皆様も多いかと存じますが、アソシエーション・リワード　プログラムとは長距離電話会社のＳＴ＆Ｔが一昨年より始めたプログラムで、ＡＴ＆Ｔをお使いの方の電話使用料金の５％が登録されている非営利団体に寄付されるというものです。このプログラムに参加されたからといって皆様方の電話料金やサービスは一切影響を受けるものではありません。

このﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑを通して得た資金は広く学園の設備充実に役立てたいと考えております。どうぞ、皆様のご協力をお願い申し上げます。

まず、第１回目の目標として屋外の運動用具を希望しております。
購入金額に達した所で購入、設置させて頂きますので、よろしくご協力の程お願い申し上げます。
尚、ご協力頂いた皆様のお名前をプレートに刻み、購入させて頂いた遊具に掲示させて頂く予定でおります。

第１回　ＡＴ＆Ｔによるプログラムでの購入予定品（写真と同じ様な物）

プレイグラウンド遊具



※本学園と致しましてはＡＴ＆Ｔのﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ を有効に利用させて頂き、本学園の設備充実に役立てることが目的であり、決して他の電話会社を排除する意図はないことを明記しておきます。

1993-1994 Friendship Fund 報告

１９９３年夏に設立致しましたニューヨーク育英学園フレンドシップ・ファンド。お陰様で多数の方々からのご支援ご支持を頂きました。遠く日本からも数多くのご支援を頂き、学園関係者一同、深く感謝申し上げます。

ここに１９９３－１９９４年度のフレンドシップ・ファンドの会計報告をさせて頂きます。

会計年度　１９９３年９月～１９９４年３月

納入額　＄３３，８２４．９６

内訳	運動場フェンス修理、ステップ設置・・	＄　２，９５７.50
	園庭フェンス修理　・・・・・・・・・	＄　３，２５０
	電気工事、ﾌｧｲﾔｰｱﾗｰﾑ付け変え　・・・・	＄　３，１５８
	小学部（６年生）教室改築　・・・・・	＄　４，４７５
	幼児部（年少、年中、年長）保育室改築	＄　１，１７１.85
	トイレ修理、更衣室設置・・・・・・・	＄　　７１０
	砂場設置　・・・・・・・・・・・・・	＄　１，３５９.10
	ｽｸｰﾙﾊﾞｽ１台買い替え１回目支払い　・・	＄　１，４２０
	園舎内塗装・・・・・・・・・・・・・	＄　１，４７２.64
	園舎大屋根改修費 一部　・・・・・・	＄１３，８５０.87

以上、ご報告申し上げます。

１９９４－１９９５年度も引き続き皆様のご支援を宜しくお願い申し上げます。

１９９４－１９９５年度　フレンドシップ・ファンド使用予定

築７０余年の歴史的建築物でもある本学園園舎は、落ち着いた風格ある学び舎ではありますが、水漏れがあるため、今までは間に合わせ程度の改修を繰り返して参りました。しかし、この夏には、思い切って大屋根全体の修理改修に踏み切りました。これにより屋根裏の材木等、園舎全体に及ぼす影響をくい止めることができました。これからも、この歴史ある園舎の傷んだ部分の改修を進め、園児達が快適にこの母校で勉学ができるようにして参りたいと考えております。
改修計画には、約３万ドルが必要とされております。
つきましては、度々のお願いで心苦しく思いますが、是非、皆様の温かいご支援を宜しくお願い申し上げます。

DONORS

YASUTAKE FAMILY
ASANO FAMILY
Ms. OKADA
Mr. NAKAMURA
Mr. YAMADA
Mr. MIYATA
Mr. TSUCHIYA
Ms. KUBO
Mr. INOUE
Mr. SHIRAKAWA
SHIRAKAWA FAMILY
HIDA FAMILY
Mr. MATSUMOTO
Mr. MIYAO
Mr. HAMASAKI
TSUKAHARA FAMILY
NAKAMURA FAMILY
YOIKO NO KAI
Mr.& Mrs. BANDO
富山中部高校第２０回同窓会
Mr. OKAMOTO
Mr. YOSHIDA
KUSU FAMILY
TAKEMORI FAMILY
KOIZUMI FAMILY
TANAKA FAMILY
YAMAGUCHI FAMILY
Mr. SHIMAMOTO
USAMI FAMILY
NAKAYAMA FAMILY
AONO FAMILY
KOYAMA FAMILY
SATOH FAMILY
NICHOLDS & SAYOKO
TAKECHI FAMILY
SHIRAI FAMILY
NAKAGAKI FAMILY
Ms. JUKUHOKU
Mr. & Mrs. FUKUYAMA
UEHARA FAMILY
Mr. TANABE
ANZAI FAMILY
Mr. ABE
KONDO FAMILY
Ms. ETO
SATO FAMILY
KIYOKAWA FAMILY
Mr. HIRATA
OIKAWA FAMILY
Ms. TAHARA
YANAGAWA FAMILY
MORITA FAMILY
Ms. YAMANAKA
Mr. TAHARA
NAKAJIMA FAMILY
Mr. KOYAMA
Mr. FURUYAMA

※ＮＹ育英学園フレンドシップ：ファンドへのご協力ありがとうございました。

